

「機知」、あるいは「結合術的実験」 —フリードリヒ・シュレーゲルの断章的書法の本質—

酒 田 健 一

本講はフリードリヒ・シュレーゲルの思想の森の道案内を意図したものだが、論者がそのための導きの糸としたのは、「自我は自我より大である」(PL VIII-197) *という不等号定式によって言い表される彼独自の自我論である。それは「自我=自我」という等号によって定式化されるフィヒテの自我論——自我は自我自身を定立する、自我は自我自身によって自我に対して非我を反立する、しかし根源的には自我のみがあるのだから、非我=自我、自我=非我、ゆえに自我=自我という定式の絶対性は揺るがないとするフィヒテの自我論(1794年刊行の『全知識学の基礎』)——を一挙に乗り越えて対象読解の新たな地平に降り立とうとした独自の批評理論の構成原理となるべき自我論である。

フィヒテは『全知識学の基礎』の三年後の1797年に書かれた『知識学への第一序論』において「外界」との一切の絆を断ち切ることを要求する。「君自身に注目せよ、君を取り巻く一切のものから眼を転じて君の内部へと向けよ——これが哲学がその学徒に向かつてなす第一の要求である。ここで問題となるのは君以外の何ものでもなく、もっぱら君自身なのだ」と。そしてこの自己注視の徹底の極致においてわれわれが見出すのが、フィヒテによれば主観と客観(自我と非我、精神と自然)との根源的同一性を無謀的に覚知する自我の純粹自己直観としての「知的直観」であって、一切の経験的意識に先立つこの自我の主客合一の根源直観から、フィヒテは自我の存在の唯一性を導出する。「自我は根源的に自己自身の存在を定立するもの」として、すなわち「自我は存在するがゆえに存在するもの」として自我のみがあり、自我の活動のみがあり、自我の活動の所産のみがあると。確かに自我に対して自我にあらざる一切のもの、非我が反立される。だがこの非我は自我の根源的活動の所産として「自我の内」に反立されるのであり、非我が非我の根源的活動の所産として「自我の外」に非我をいわば「非我自体」として定立するのではない。自我の唯一性を拒むこのような「非我自体」、カント的に言えば「物自体」(Ding an sich)は背理である。真に実在的な概念は「自我自体」(Ich an sich)である。

フリードリヒ・シュレーゲルは反論する。「不当にも最初の〔1794年の〕『知識学』では自我のみが描かれている。」(PL IV 1318)——「奇妙なことに最初の『知識学』では自我との弁証法しかない。彼の哲学の自我は非我を欠いている」(PL IV-684)——「フィヒ

* 各引用断章文末の括弧()内の記号と数字は、ベラー全集版(KA)収録の次の四断章集のそれを示している。

LF (Lyceums Fragmente) (KA II)

AF (Athenaeums Fragmente) (KA II)

FPL (Fragmente zur Poesie und Literatur) (KA XVI, XVII)

PL (Philosophische Lehrjahre) (KA XVIII, XIX)

テの論脈からすれば、 $A = A$ からまったく同様に《非我は非我自体を定立する》が帰結されないだろうか。」(PL Beil.I-51) —— 「非我は空疎な言葉である。それは〈何か〉と呼ばれるべきだろう。」(PL IV-1253) —— 「フィヒテは実のところ、片側から馬に乗ってはそれを乗り越えて (transcendiren) 向う側に落ちるという行為を飽きもせず繰り返している酔っ払いに似ている。」(PL II-138) —— 要するに『『知識学』はフィヒテの文字によるフィヒテの精神のフィヒテ的描写』(PL II-144) を出るものではない。

「根源自我」(Ur-Ich) と「対我」(Gegen-Ich)

フリードリヒ・シュレーゲルは1804年に始まるケルン私講義『哲学の展開十二講』第四講『意識の理論としての心理学』の第一章『直観論』において、「われわれは自己をかくも有限と感じながら、同時に自己の内的無限性を確信せざるを得ないのはなぜか」という「自己意識の謎」に導かれて、一切の個体的自我を包含する「根源自我」の概念に達する過程を描く。自我は自己を有限であると同時に無限であると感じる。この「感情の二律背反」は「生成」の概念の導入によって解決される。すなわち「生成する無限なるもの」はその生成の全行程を完了しない限りにおいて——しかし「無限なるもの」はまさにその無限性のゆえにおのれの生成を完了することはない——有限的であり、「生成する有限なもの」はその「内的生命力と活動の無限性」を含む限りにおいて無限である。生成の概念は「無限なるもの」と有限的なものとの分断する深淵を埋め、両者の根源的同一性を立証する。自我は有限であり、かつ無限である。自我が有限であるとき、すなわち個体的、派生的であるとき、自我は自我の外に自我にあらざる一切のもの、すなわち「非我」を自我の対象として持つ。しかしこれは「錯覚」である。自我が無限であるとき、すなわち自我が生成する「唯一無限の実体」、すなわち「根源自我」と一体的であるとき、あるいは一体的であると感じるとき、自我の対象は自我の内にある。万象は「生成する無限なるもの」としての「根源自我」の無限の能産と所産の総体である。この生成の絶対的主語である「無限なるもの」が「根源自我」＝「世界創造的自我」と捉えられることによって、生成の能産と所産のすべてはことごとく「自我性」の概念のうちに汲み尽くされる。根源的には自我以外に何もかも存在しない。端的に自我のみが存在する。それゆえ自我の外に定立され、自我を何らかの仕方で限定するような「非我」の概念は破棄される。いかなる外的対象も「根源的他者」として自我に対して反立されるような「非我」ではない。それは「根源自我」の「本質同一者」、あるいは「本質分与者」として自我に向かい合っ

て立つもう一つの自我としての「対我」、あるいは「君」(Du) である。「私は、私であると同時に君であり、彼であり、彼らであり、君たちであり、われわれである。」——私の中で、唯一無限の絶対的一人称である「根源自我」から無限に産出されるその時々

の派生的・個体的自我のあらゆる人称代名詞が生きて脈動している。われわれはそのつど常に「より大きなわれわれ」に包摂されてゆくそのつど常に「より小さなわれわれ」として、「われわれはわれわれの一部にすぎない」存在として、そのつど常に到る所により多くの

「われわれ自身」を見出す。ただこれらもろもろの「われわれ」、それぞれがそれ固有の多種多様な衣装を纏って現れ出ている「われわれ」の内的本質を窺い知るには「われわれ」相互の個体的特殊性の制約が大きすぎるというにすぎない。対象性とは「唯一なる精神を覆うヴェール」、いわば「無限の形成と変形」のうちに織りなされる森羅万象の不思議の「象形文字」（『神話論』）であり、このヴェールが取り払われ、この象形文字のすべてが解読された暁——それはそのつど常に無限の彼方へと遠のいてゆく永遠に到達し得ない非時間的・終末論的究極の一瞬だが——そうした暁には、一切の外的対象はその内的本質を——われわれもまたそれであるところの「根源自我」の創造の一部始終を語るだろう。

対象は単なる非我に留まる限り無に等しい。しかしその有限性の制約のうちに幽閉された「君」として、自我に向かって語り掛けるもう一つの自我（対我）として、その固有の「形象」、独自の「言葉」によってわれわれにその本質の「意味」（Bedeutung）を開示するとき、あるいは開示しようとするかに見えるとき、対象ははじめて何ものかになる。対象はそれ自身の存在によって実在性を得るのではない。対象の実在性は、対象が自我に対して、自我に向かい合って立つもう一つの自我、自我に向かって呼び掛け、かつまた自我の呼び掛けに応答する「生きた、活力に満ちた対我」となることによって与えられる。すなわち「意味」というこの新たな仲介項によって緊密に結ばれてはじめて、対象は「対＝自我」（Gegen-Ich）として、自我は「対事物」（Gegen-Ding）として緊密な、根源的に同一の血を分け合ったものの「相互証明的連関」という一種の楕円の相関関係を形成する。ここで言う楕円の相関関係とは、単に「自我」と「対象」という「二つの中心」を持つだけでなく、この二つの中心が互いに何ごとかを告げようとして「向かい合って立つ」ところに成立する対象読解のための解釈学的空間を意味する。対象を認識するということは、それが語り出ようとするその固有の「意味」を理解すること、少なくとも「予感」、ないしは「予見」することである。そしてこのような理解ないしは予感、予見のうちに確立される対象と自我との「対話」の関係をシュレーゲルは、両者の「愛に充ちた合一」と呼ぶ。

宇宙は唯一者「根源自我」の無限の創造、無限の自己客体化の無限の過程である。自我の外にはいかなる根源的他者も存在しない。「自我の唯一性」から見れば、宇宙は絶対的統一性（全一性）の相のもとに現れ、その創造性（生成過程）から見れば「無限の多様性と充溢」の相のもとに顕現する。宇宙を満たす一切の事物はその個性のゆえに有限的であると同時に、「根源自我」の生命の分与者として無限的であり、その根源の同一性ないしは同質性によって、どれほどその外見、組織、器官を異にしようとも、互いに「それは私だ」と指さし合う。「生成する宇宙、すなわち自然以外にいかなる宇宙も存在しない」（PL III-412）という意味での「無限に生成する宇宙」として絶えずわれわれに向かってその秘められた「意味」を告げ知らせようと千変万化する姿かたちを借りて語り掛けてくるかに見える万象は、それゆえわれわれにその読解を迫ってやまない唯一無限の実体である「根源自我」の多種多様な様態である。

対象読解能力の基礎としての産出的構想力

このような「根源自我」の多種多様な様態の読解、あるいは「生成する宇宙、すなわち自然以外にいかなる宇宙も存在しない」(PL III-412) という意味での「自然の象形文字」の解読のためには、対象と自我とのあの楕円関係を確保しつつ対象の内側に潜む「意味」を直接的、無媒介的に把握し、あらゆる対象を生命に充ちた「対我」として蘇らせる能力が要求される。これが「内的直観」、「精神的直観」、「感情」であり、「直観する自我と直観される自我(対象)」との「愛に充ちた接触、和合」を可能にする能力である。むろん対象を覆う「対象性」のヴェールは厚く、多種多様を極め、複雑多岐にわたり、人間の精神的能力の限界を遙かに超えるため、この能力が産出する対象認識と対象理解は常に「予感」、「推測」の域を出ず、その陳述は常に「予見的」であるほかはない。

ところで「意味」を介して「直観する自我と直観される自我(対象)」との間に営まれる「愛の行為」は、シュレーゲルにとっては同時に「美の行為」であり、「精神的直観」は同時に美の産出能力として「美的直観」である。美は単に直観するものの側からする一方的産出ではなく、「直観するものと直観されるもの」との協同的産出(Symproduktion)である。それゆえ美の理想は「無限の多様性と充溢」の予感が「無限の統一性」の想起と合流するところ、あるいは美的直観がその「愛の行為」を完成して対象の「意味」を完全に理解するところ、すなわち「自然の象形文字」の解読の瞬間において実現される。そして「直観する自我と直観される自我」とのこのような接触から生じるこのような「相互理解の稲妻」がもはや解明し難い精神の「瞬間的創造」、いわば「無からの創造」と見られる限りにおいて、精神的直観は「詩作」と呼ばれる。この「詩作」の源泉が産出的構想力であり、その活動は自我の全域に及び、「無限の多様性と充溢」に向かって自己を無限に拡張してゆく活動としてあらゆる詩的能力の基礎である。しかしそれはまた同時に「無限の多様性と充溢」のすべてを自己のうちに包摂しつつ自己のうちへと収縮・回帰してゆく活動の担い手として、「根源自我の無限創造」の全的総括を目指す哲学的能力の基礎でもある。美的産出の極致は、それゆえ同時に哲学的認識の完成の瞬間をも意味する。このような詩的・哲学的両能力の共通の源泉である産出的構想力をシュレーゲルは「魂の呼吸」(Ein- und Ausatmen der Seele)と呼び、その収縮と拡張の中で「直観する自我と直観される自我(対象)」とがその協同産出的作業として生み出すものを、自我の対象認識がそのまま「対象の自己表現」であるという意味での「形象」と「言葉」として捉えようとする。自我が対象と共に産出する「対象の自己表現」と見られる限りでの「形象」と「言葉」は、それゆえ対象読解という解釈学的作業にとっての不可欠概念である。

アナロジーの能力、あるいは「結合術的精神」の「実験」としての機知

対象からの語り掛けと解されることによってはじめて解読可能なものとなる「自然の象

形文字」は、われわれの産出的構想力が創り出す「形象」と「言葉」を介しての対象への呼び掛けとこれへの対象からの応答の形象化であり、われわれによってわれわれにいわば「判読可能」なものへ翻訳された対象の自己表現である。そしてこの判読の能力が、「形象」（アレゴリー）を介して「無限なるもの」を「意識」へともたらず能力としての「予見」（Divination）である。それゆえわれわれと対象との「対話」は常に対象からの語り掛けの訳し返しという意味での「類推」としての「アナロジー」の上に成立しているのであり、「対話」の記録は常に「予見的」である。無限に生成しつつ不断に変転する森羅万象の読解の記録の集成は、それゆえ「アナロジー」（無限接近、あるいは永遠の近似値としての蓋然性）に基づく、いわば「予見の体系」としてのみ構成可能である。

シュレーゲルは1805年に始まるもう一つのケルン私講義『序説と論理学』の第三章第二節の『三段論法』において、単なる所与の経験の分析に終始する形式論理学的三段論法に基づく明証的な確然的推論に対して、永遠に完結することのない「無限に生成する宇宙」の全体とその発生論的展開の全過程のあらゆる段階、あらゆる局面をそのつど余すところなく「特性描写」することに耐え得る真に哲学的三段論法は、「蓋然性ないしはアナロジーによる推論」に基づく三段論法以外にはあり得ないとし、これを大前提（生成の総体）が暗黙のうちに省略されている「特殊な省略三段論法」に喩えている。そして推論の一貫した論証性と完結性を到る所で断ち切ってしまうかに見えるこの特殊な論法ないしは推論の主導原理である「アナロジー」の能力を、シュレーゲルはその三年前のイエーナ大学講義『超越論的哲学』の第三部『哲学の哲学』において「天才」と呼び、これを、「永遠に生成する宇宙の総体」の「永遠に完成することのない認識」を「あたかも完成されているかのように描出」する仲介能力と定義し、この仲介能力を介して描き出される「宇宙に関するあらゆる個々の未完成の認識」の一つ一つを「宇宙に対する一つの新しい言葉」として捉えようとする。無限に生成する宇宙へのこのような人間的関与のすべてを「宇宙に対する一つの新しい言葉」として眺め、かつ読み解こうとする見地と技法が、「蓋然性の論理学」としての「アナロジー」なのである。「アナロジーはたぶん矛盾律と根拠律との総合であって、結合術的案出の技法の最初の芽生えを含んでいる。」（PL V-267）

アナロジーを「結合術的案出の技法の最初の芽生え」と捉えているこの断章は、イエーナ大学講義と同時期のものだが、この講義の「天才」に関する先の一文に続く箇所ではシュレーゲルは、アナロジーを駆使する創意、案出の能力、あるいは経験と理論とを仲介する能力としての「結合術的精神」に言及し、次のように述べている。「類似性の真理がアナロジーである。さまざまな類似性を知覚する力が結合術的精神である。この結合術的精神の圏域は徹頭徹尾無規定的である。しかしこの精神がその力を発動させるに際して従うべき一つの方法がなければならない。この方法が実験であるだろう」と。われわれの有限的な現象世界を限りなく多彩な創意、案出、発見によって充満させているのが、無限に多くの「類似性の真理」ないしは「真理の近似値」の切れ切れの断片を知覚し、それらをさまざまに組み合わせ、結び合わせ、そこに何らかの「意味連関」（論理的連関ではない）を創り出してゆく能力、すなわち「アナロジーを駆使する」能力としての「結合術的精神」

である。この「結合術的精神」をシュレーゲルは「機知」の能力と一体的に捉え、これを文学的資質ばかりでなく哲学的資質の必須条件の一つに数えている。

シュレーゲルは前記ケルン私講義『哲学の展開十二講』の第四講『意識論としての心理学』第三章『人間意識個別論』の中で次のように述べている。機知とは、「見かけはまったく無関係な、互いに異質で隔絶された諸対象の間にさまざまな類似性を発見する」ことによって、それらをその時々の特異な意味連関のうちに結合する能力であり、このような機知が包括する「多様性と充溢」が多ければ多いほど、また結合される諸対象の質的差異が大きければ大きいほど、それだけ機知は「輝かしい」ものとなる。そしてこの限りなく多岐にわたるこの結合術的能力によって「精神的直観」が産出する予感に満ちた多種多様の認識は、時には一種の「学問的高み」にまでも上昇する。この意味で「機知」は個体的意識における精神的直観の特質的な一形式であるばかりでなく、語の最高の意味において「知の最高原理」でもある。機知は「予見」によって「創意」へと持ちきたらされる諸対象の「多様性と充溢」を、その独特な結合術によって更に「学問的形式」のうちへと運び込むのであって、かくして単に「確実性をもって知られたもの」の住処でしかなかった哲学的知の領域を無限の「豊穡と多様性」の国土へと拡充するのである。哲学史上の偉大な創見のほとんどすべてはこのような「機知」の所産である。「機知」こそが「学問的創意の原理」でなければならない。「結合術的精神」としての「機知」の欠如が学問の空疎と乾燥無味の元凶である。シュレーゲルは『アテネウム断章集』の一つで書いている。

「すべての機知は普遍的哲学の原理にして器官であり、また、すべての哲学は普遍性の精神、永遠に混合と分離を繰り返すあらゆる学問の中の学問、いわば論理的化学以外の何ものでもないのだから、あの絶対的な、熱狂的な、徹頭徹尾質料的な機知——この分野での達人がスコラの散文の両巨頭ベイコンとライプニッツであり、前者はその最初の一人、後者はその最大の一人だったが——の価値と尊厳は測り知れない。」(AF 220)

「無意識の世界からの稲妻」としての機知

上記の『人間意識個別論』において、フリードリヒ・シュレーゲルは「機知」の源泉とその本質的性格について新たな視点からする新たな理論を展開する。「唯一無限の実体」としての「根源自我」から無限に産出される派生的・個体的自我は、あの「感情の二律背反」によってこの一切の経験的意識の彼岸に横たわる「根源自我」との「同一性」の確信へと目覚める。だがこの覚醒は同時に個体的・経験的自我に自己の派生的現実をそれだけ一層鋭く自覚させる。「われわれはわれわれの一部にすぎない」——この本来は一切の自我の個性性と有限性の廃棄を帰結する命題も、ここでは個体的、有限的意識の尖鋭的表現となる。そして自己を一個の「本源から引き千切られた断片」と感じる自我の意識はこの意識に最も相応しい発現形式を「断片的・断想的・断章的なもの」のうちに見出す。これが人間意識の特質的な形式として見られる限りでの「機知」の原質であり、その発現形態の特質は、連関性、連続性の徹底的な欠落である。いかに恣意的で奔放な想像力の活動の

中にも何らかの発想の脈絡は見出される。しかし「機知」は先行する文脈との間にいかなる連関も求めることなく、時にはかえってそこからの意図的な逸脱を図るかのような非連続性と意表を衝く唐突さをもって、個々ばらばらに、いわば隊伍を乱して逃げ散り、駆け抜ける「脱走兵」のように、あるいは「意識の世界と並んで存在する無意識の世界からの稲妻」のように出現して、個体的自我の「派生的意識の断片的情况」を鋭く、かつ鮮やかに描き出す。「機知」とは、いわば「根源自我」が「派生的自我」との間を隔てる「個体化原理」の仮象の壁を一挙に突き破り、突如として、無媒介的に個体的自我の全意識を占拠する一瞬の衝撃である。このような「意識的なもの」と「無意識的なもの」との、「派生的自我」と「根源自我」との予期せぬ合体の火花が「機知」の本来の姿である。「機知とは縛められた精神の爆発である。」(LF 90)——「機知に富んだ思いつきの多くは、長い別離ののちに訪れた二つの親密な思想の予期せぬ再会に似ている。」(AF 37)

根源自我の思想は孤立した個体的自我の廃棄の理論である。絶対的他者、あるいは根源的非我は存在しない。一切は自我、〈私〉であり、〈われわれ〉である。この唯一無二の根源者の創造の普遍性と無限性のうちに、根源者との同一性を確信する限りでの個体的自我の諸能力、精神的直観、美的直観、産出的構想力(想像力)、すなわち芸術的=哲学的創造力の普遍性と無限性は基づくのである。だがしかし個体的自我は「根源自我」との本源の同一性と一体性の深い形而上学的感情に充たされつつも、逃れようもなくその有限的諸制約のもとに立たざるを得ない自己の派生的存在としての宿命を一層鋭く自覚する。この痛切な孤絶の意識に貫かれて、個体的自我は自己の自立的・独自の存在者としての唯一性を一層鋭く主張する。個体的自我は廃棄されない、いや、真に実在的であるのは個体的自我のみであると。個体的自我のみがある。これが自我の現実である。「私」の語る言葉は「私」のうちなる「根源自我」の思想であるだろう。しかしそれはあくまでも「私」の口を借りて語られるのである。一切の個性性を廃棄する「根源自我」の思想に導いた「感情の二律背反」、すなわち「私は有限であると同時に無限である」という命題は、「私は無限であると同時に有限である」という倒立命題となって個体的自我の意識の全域を充たす。「私」の現実は、「根源自我」すなわち「無限の私」から引き裂かれた派生的自我の切れ切れの断片でしかない「有限の私」以外の何ものでもない。このような個体的自我の本源離脱感情、自己存在の非本来性の自覚的・無自覚的意識の最も先鋭な発現形式が、あるいは一切の論理の一貫性(根源自我の普遍性)からのいわば敵前逃亡的「脱走兵」の複雑骨折的自己弁明の形式が、あの「結合術的実験」の光彩陸離たる成果を誇る「機知」の原質なのである。そしてまさにこの点にフリードリヒ・シュレーゲルの断章の書法の无尽蔵の活力とその際限のない饒舌の底知れない虚しさのすべてが凝縮している。

以下、「私の哲学は諸断章の体系、諸構想の進展である」(PL II-857)と書き、「断章は私にとって伝達の本来の、そして最良の形式である」(PL VIII-106)と書き、また「私の表向きの(exoterisch)著作は、プラトンの対話篇と同様、むしろ序論的なものといえるだろう」(PL V-257)と書き、「断章はそれゆえとりわけ秘められた(esoterisch)もののためにある」(PL VIII-219)と書いたフリードリヒ・シュレーゲルのいわば秘儀的、秘法

伝授的書法、相互の論理的連関を意図的＝非意図的に断ち切ったところで作為的＝非作為的に行われる「結合術的実験」、「機知」という名の「結合術的精神」が産出する夥しい言葉と形象、一切の論証性を嫌って恣意的に飛び交う言葉と形象のカオスの一端を、優に二万点を越す彼の断章群のほんの一撮みを、主として「アナロジー」、「機知」、それに彼の思考回路の到る所に潜み隠れている「イロニー」の概念に照準を絞って、ただし一切の解説、説明抜きで列挙してゆこう。彼は書いている、「主張したり定立したりするのは、説明したりするのと同様、本来の意味で不粹である」(PL V-1016) と。

*

- 「アナロジーは宇宙の特性描写のための原理である。」(PL IV-213)
- 「プラトンと哲学的対話、すなわちアナロジーを介して宇宙へと連れ戻そうとする哲学的対話との関係は、シェイクスピアと演劇との関係に等しい。」(PL IV-1235)
- 「すべてのアナロジーは無限接近である。」(PL IV-1406)
- 「真の象形文字は宇宙についてのアナロジー、すなわち宗教的形式をとった宇宙への無限接近である。」(PL IV-1412)
- 「宇宙についてのアナロジーは予見の演繹と弁明をもって始まらねばならない。——アナロジーは本来歴史の精神と魂を含むものである。」(PL IV-1436)
- 「宇宙の理論に関わらねばならないアナロジーなくしては、いかなる歴史学も存在しない。それゆえ批評が文学を目指すように、歴史学が哲学から成立することもあり得るのである。」(PL IV-1446)
- 「アナロジーの究極の根拠は原理ではなく秘儀である。」(PL V-80)
- 「アナロジーの積極的な要素は予見である。消極的要素は根拠律と矛盾律のうちに表現されている。」(PL V-892)
- 「アナロジーとイロニーが三段論法の内的ファクターであるだろう。」(PL V-1022)
- 「一つの真理が他の諸真理から帰結されるということは、一切の真理は一なるもののうちにあるということをすでに前提している。一切のものは一なるもののうちにあり、一なるものは一切のもののうちにある、これがアナロジーの魂である。」(PL V-1131)
- 「すべての機知は哲学との類縁性を持っている。」(PL II-101)
- 「機知は、応用論理学、すなわち神秘的、政治的、総合的論理学として、歴史的論理学に属している。機知は質料的論理学の開始である。」(PL II-402)
- 「機知は短縮された叡知である。」(PL II-711)
- 「機知は超越論的論理学、断章的神秘論である。」(PL II-730)
- 「機知は本来絶対的な論理的恣意の所産であり、かつその領域でもあるだろう。——恣意が絶対化された自由であるとすれば、恣意のアンティテーゼは偶然、すなわち絶対化された必然性である。——恣意と偶然は絶対的哲学に属している。——ロマン主義文学における絶対的に恣意的で個性的なものは、それゆえ絶対的な領域に由来する。——〈ハルデンベルクは体系的哲学者であるよりは絶対的哲学者である。——〉スピノザは偶然と恣意の唯一危険な敵対者である。——スピノザにとっては一切のものが仲介項で

ある。——機知は絶対的なものの領域の中にこそ存在しないが、しかし機知がより絶対的になればなるほど、それだけ洗練されてゆくのは言うまでもない。」(PL II-1002)

- 「独創性、熱狂、機知、そして普遍性が、人間形成の要素である。」(PL II-1027)
- 「神秘論は単に神学だけをその本来の住処とするものではけっしてない。それは、いわば近代の神話とでも言うべきものではないのか。それとも機知が近代の神話を形成すべきなのだろうか。」(PL III-7)
- 「機知は神話的技法であるかもしれない。——近代の機知は神秘論をもって始まったのであり、そのあり方からして神秘的である。」(PL III-10)
- 「機知、結合の技法 (ars combinatoria)、批評、案出の技法、これらはすべて同一のものである。」(PL III-20)
- 「代数学のうちに数学的機知と熱狂は住みついている。哲学的機知にとってもまた代数学から学び得るものは多々ある。数学と哲学との結合は不可避の課題である。哲学的言語は、それが数学的言語に類似するようになればなるほど良質なものとなる。それは文学のアナロジーからしても言えることである。」(PL III-102)
- 「機知と宗教はきわめて密接な関係にある。古代神話と聖書以上に機知に満ちたものはない。」(PL III-138)
- 「機知は一つの医学的能力である。構想力と感覚も同様である。」(PL III-153)
- 「花々は植物の電氣的な火花と光線である。植物には機知と人間性が最も多く具わっている。」(PL III-249)
- 「予見は占星術と歴史の原理である、これほど確かなことはない。すべての機知はその最内奥の核心において予見的であり、占星術的である。」(PL III-376)
- 「物理学者は自然と関わり、数学者は宇宙と関わる。物理学は一つの芸術であり——機知と信仰が等しくそこを支配している。——〈機知を持たない物理学者ほど憐れむべき存在はない。〉占星術を目指さないような物理学はすべて屑である。」(PL III-378)
- 「道徳的不死性は、物理的に考えれば限りなく機知に満ちている。」(PL III-487)
- 「機知は普遍的化学である。」(PL IV-440)
- 「すべての能動的な機知はアレゴリー、すなわち神話的であり、イロニーは化学的、都会的優雅さは歴史的である。これらすべてのものは神的であり、微笑んでいる。批評は純粹化学の哲学的技法である。」(PL IV-466)
- 「機知は中心に位置しないもの、中心逸脱的なものである。——機知は純粹な哲学的、倫理的、文学的な原理と言えらるう。」(PL IV-470)
- 「すべての機知は予見的である。」(PL IV-693)
- 「機知を学問として、芸術として、結合術的技法の原理として構成することは、宗教の構成とまったく同様に不可欠である。機知は宗教よりも遙かに多く普遍性との類縁性を持っているかに見える。機知は往々にして形を換えただけの宗教と言えらるう。——近代人の政治史もまた明らかにきわめてグロテスクで機知に満ちている。」(PL IV-784)
- 「相対的なものはすべて実在的であり、絶対的なものはすべて観念的である。機知はも

- っばらその綜合、すなわち兩斷されたものの純粹な綜合から生じる。」(PL IV-813)
- 「すべての機知は音樂的である。すなわち音樂の精神において文法的であり、神話的である。」(PL IV-855)
 - 「体系とカオス、文法と神話は、知識学〔學問論〕の素材であり、機知はその原理、数学はその形式である。」(PL IV-950)
 - 「ドイツの自然哲學者たちは哲學者ではけっしてなく、機知の達人、ものを書く聖戰者である。」(PL IV-980)
 - 「言語と機知は形而上學に属している。機知に富んでいないような形而上學は役立たずである。」(PL IV-1208)
 - 「最高の機知は眞の宇宙の特性描写の言語 (lingua characteristic universalis) であり、そして同時に結合の技法 (ars combinatoria) でもあるだろう。」(PL IV-1030)
 - 「翻譯は機知の藝術作品である。それは方言の概念に関わっている。翻譯の命法は言語の統一性の要請に基づいている。——すべての翻譯は少なくとも研究と言えるものでなければならない。——〈從來の翻譯はすべてエッセーにすぎない。〉」(PL IV-1099)
 - 「どんな仮綴本も必然的に哲學的である。書評が批判的で、演劇が詩的であるように。——〈機知は結合術的論争である。——演劇的なものはすべて何らかの機知に富んだ形式を追い求める。〉」(PL IV-1179)
 - 「機知は、哲學や文學と同様、宗教の器官である。」(PL IV-1197)
 - 「機知は修辭よりも遙かに高次のものであり——最高度に予言的、予見的である。——機知は靈感であり、特性描写は予見である。予見はすべての經驗の——そしてまた靈感の——原理であるだろう。理解と案出のすべてはこのようにして生じる。」(PL IV-1352)
 - 「機知の最内奥の本質はもっぱら理念の魔術からのみ説明され得る。形成の諸法則が調和の秘儀から説明されるように。」(PL IV-1365)
 - 「機知は、藝術の諸法則を見出し、諸學問の結合を達成するためには不可欠である。」(PL IV-1416)
 - 「機知は、現象ファンタジー (phantasia phaenomenon) である。」(PL IV-1456)
 - 「最良の機知は力動的機知であり、それによって理念の魔術は発動する。——すべての理念は機知に富んでいる。」(PL IV-1425)
 - 「あらゆる教養は最終的には占星術的であり、あらゆる學問は魔術的である。機知はその最初の萌芽である。」(PL V-231)
 - 「機知の最内奥の核心は占星術的であり、信仰は魔術的である。」(PL V-301)
 - 「機知はローマンの、神話の、そしてエンツィクロペディーの原理である。——信仰は道德的実践の、宗教の、そして教訓的なものの原理である。」(PL V-339)
 - 「宗教においては信仰が支配し、神話においては機知が支配する。」(PL V-345)
 - 「案出と機知の技法は論理學の秘儀である。」(PL V-545)
 - 「機知はファンタジーと悟性との綜合であり、それゆえ表象能力全体の中心である。」

(PL V-592)

- 「論争には宗教と機知が充満している。」(PL V-761)
- 「機知は、一切のものが飽和する無差別点である。」(PL V-856)
- 「道徳は機知とまったく同様、普遍的な化学的結合の原理である。」(PL V-882)
- 「機知とは無条件的に社交的な精神である。あるいは断章的独創性である。」(LF 9)
- 「機知とは論理的社交性である。」(LF 56)
- 「悟性は機械的な、機知は化学的な、天才は有機的な精神である。」(AF 366)
- 「機知は構想力の顕現、それが外に向かって現れ出た稲妻である。機知が神的性格を帯び、神秘主義が機知に類似しているのはそのためである。」(ID 26)
- 「イロニーは絶え間のないパレクパーゼである。」(PL II-668)
- 「ライブニッツにおけるような結合術的機知は、本来絶対的哲学にこそ適合するものである。体系的哲学の循環性はイロニーに相応している。そうでなくともイロニーはここでは不可能な絶対化の重要な代替物である。」(PL II-976)
- 「イロニーが素材の絶対化を目指すとするば、パロディは形式の絶対化を目指す。」(PL II-968)
- 「イロニーとはいわば宇宙への感覚の無限性、普遍性の顕現である。」(PL III-76)
- 「イロニーは化学的な熱狂であり、修辞は化学的なエネルギーである。」(PL IV-67)
- 「イロニーは常に機知的とは限らないが、しかし常に熱狂的である。」(PL IV-70)
- 「イロニーは内的なもの、機知はその現れにすぎない。——イロニーは自立性であると同時に愛であって、宇宙への感受性なしには不可能であり、幸福感（すなわち完全性）と密接な関係にある。——無限なるものへの感受性を欠いた勇敢さ、偉大さというものがある。イロニーは美しい神聖さである。イロニーは倫理学および哲学と文学との合体を暗示している。」(PL IV-76)
- 「イロニーは熱狂、独創性、練達性、エネルギーが合したものである。」(PL IV-275)
- 「イロニーとは敏捷性における明瞭なカオスであり、永遠のカオスの、無限に豊かで独創的な、永遠に循環的なカオスの知的直観である。——〈愛はたぶんイロニーに先立つカオス。——一人の若者のうちにまどろむ諸力の全能である。〉」(PL IV-411)
- 「イロニーは化学的独創性である。」(PL IV-465)
- 「イロニーは最高にして最も純粋な懷疑である。」(PL V-1023)
- 「ロマン〔主義〕的機知は最高の機知である。——風刺的機知がこれに最も近く、最も類似している。ソクラテス的イロニーもこれに属する。」(FPL V-53)
- 「ソクラテス的イロニーは相互パロディ、相乗されたパロディである。」(FPL V-519)
- 「イロニーは自己パロディに等しいか。パロディは叙事詩的機知であり、予言的機知は古典的な進展的機知の固有種であり、詩的、散文的、叙事詩的、抒叙詩的、劇的、ロマン〔主義〕的、風刺的機知である。」(FPL V-783)
- 「ソクラテスには超越論的風刺がある。彼に欠けているのはただ機知であるための情

感性だけである。」(FPL V-784)

- 「ホメロスにはイロニーがある。彼自身もまた微笑んでいる。」(FPL V-1012)
- 「イロニーとパロディーとは機知の絶対種である。前者は観念的な、後者は実在的なそれである。——体系的機知はイロニーとパロディーとの総和である。——構想は実践的機知の唯一の表示である。——結合術的機知の形式が個性的な、それゆえ完全に反体系的な素材に適用されると、グロテスクな機知が生じる。——機知は芸術や学問よりも広範な領域を持っている。」(FPL V-1039)
- 「熱狂を欠き観念論的実在論を欠いたイロニーの空疎な形式ほど陳腐なものはない。」(FPL V-1056)
- 「パラドックスはイロニーにとって必須条件であり、魂であり、源泉であり、原理である。リベラルな精神が都会的優雅さの機知にとってそうであるように。」(FPL V-1078)
- 「理念とは、イロニーに達するまでに完成された概念であり、もろもろの絶対的アンティテーゼの絶対的綜合、二つの相争う思想の絶え間のない自己生産的交替である。理想とは、理念であると同時に事実である。」(AF 121)
- 「イロニーは永遠の敏捷性の、無限に豊かなカオスの明瞭な意識である。」(ID 69)
- 「イロニーにまで達し、しかも自己破壊の恣意的な外観を具えるまでに到った意図は、イロニーにまで達した本能と同様に素朴である。素朴が理論と実践との諸矛盾と戯れるように、グロテスクなものは形式と素材との気紛れな置き換えと戯れ、偶然的で奇異なものの外見を好み、いわば無制約的な恣意に媚を呈する。」(AF 305)
- 「形式と素材との純粹に恣意的な、あるいは純粹に偶然的な結合のすべてがグロテスク〔模様〕であるとするなら、哲学もまた文学と同様のグロテスク〔様式〕を持つことになるだろう。ただ哲学にはその辺の事情があまり分かっておらず、そのため哲学固有の秘められた歴史を解明する鍵をいまだに見出すことができずにいる。哲学には、われわれがそこから解体とはいかなるものかを学び知ることができるようなさまざまな道徳的不協和音によって編まれた織物であるような作品、あるいは混乱が整然と構成され、均整のとれた姿を見せているような作品がある。少なからぬ数のこの種の哲学的な人為的カオスは、ゴシック教会よりも長生きするに十分な堅牢さを具えている。」(AF 389)
- 「グロテスクなものに対する感覚がなければ、いかなる普遍性もない。グロテスクなものは普遍的遊戯である。」(PL II-1056)
- 「散文的機知には四種類ある。1) 結合術的、超越論的機知。ほとんどがすべて素材であるような機知がそれである。2) 分析的機知。高次の文献学的機知とソクラテス的イロニーとがこれに属する。3) 社交的機知。都会的優雅さ、断章的機知、ローマ人の嗅覚(Nasus)がこれである。4) 修辭的機知。これは上記三種の合成である。」(FPL V-776)
- 「諧謔的であると同時に哲学的、倫理的、文学的であるような機知、グロテスクであると同時に結合術的でイロニー的であり、かつまたパロディーでもあるような機知のみが、ロマン〔主義〕的である。——機知は独創性と完全に一体的なものではないだろう

か。」(FPL V-1038)

- 「素朴なもの（無限に、もしくはイロニーに到るまでに自然的であるような）の対立物がグロテスクなもの、あるいは無限に恣意的で偶然的な（童話的でアラベスク的な）ものであるだろう。——〈素朴なものが意図と本能に賭けているように、グロテスクなものは素材と形式に賭けている〉。」(FPL V-1075)
- 「機知のカテゴリー——グロテスク、諧謔、戯画、素朴、イロニー、都会的優雅さ、パロディ、茶番、パロック、怪奇。〈これらのものすべてはファンタジーと素材を弄ぶ。その幾つかは単に形式に関わるだけのものである。〉」(FPL IX-72)
- 「サタンの仕事は誘惑し、内面を破壊し、罪を広めることだ。サタンとは本能からするまったき意図である。サタン性は〈ドイツの発明品〉であり、ドイツにおいてはじめて正しく形成されたグロテスク美学の一概念である。」(PL II-1052)

＊

等々、等々。「アナロジー」、「機知」、「イロニー」の三概念に絞るという制限の壁を到る所で突き破りながら際限なく繰り広げられてゆく種々雑多な観念や形象の非連続的な連なり、入り口もなければ出口もないまさに文字通りのグロテスク文様の迷路の延々たる連なりは、少なからぬ人々を混乱させる。茫々たるこれら断章群の雑踏の何処が何処とどう繋がってどういう統一的な意味連関を形作っているのか。そもそもフリードリヒ・シュレーゲルの思考の確たる中心は何処にあるのか。それとも何処にもないのか。彼の脳髄には統覚的中枢があるのかないのか。フリードリヒ・シュレーゲルの数限りなく群生する断章の藪の中に踏み迷った人々のこの苛立たしげな憤懣に、彼はこう応えただろう。私の思考は、「その中心が到る所にあり、その円周は何処にもない一つの円」(『超越論的哲学』)であると。それでもなお執拗に食い下がってくる追及者に対しては、彼はそれなりの公式回答を用意していたかに見える。一七九九年の『アテネウム』誌第二巻第一輯所載の『哲学について、ドロテーアへ』の中の以下の一節がそれである。

「しかし私はともかくも徹底して一人の著述家なのだ。文字 (Schrift) というものは、私にとっていかなる秘密の魔法かは知らないが、書くということを取り巻いて漂う永遠性の薄明を通してやって来るそうした魔法をそれは持っている。そうだ、私は告白するが、この生命のない文字の羅列の中に何という秘密の力が隠されていることかと訝る思いでいる。間違いなく正確であるということ以上の何ものでもないと思えないこの極めて単純な記号が、澄んだ目で眺め渡すような意味深いものになることができるのは、あるいは最も深い魂の底から響いてくるような技巧のないアクセントを持って語り掛けてくることのできるのは一体なぜなのだろうかと。それはただ眼で読むだけなのに、まるで耳で聞く思いにさせるのだ。ところが朗読者という連中は、こうしたほんとうに美しい箇所には差しかかっても、それをせいぜい台無しにしないように努めるのが関の山なのだ。だから私には黙せる文字の羅列のほうが精神の最も深い、最も直接的な顕現がまとう覆いとして、あの唇が立てる騒々しい雑音よりも相応しいと思えてくる。そこでいっそ私はわれわれの H [ハルデンベルク、すなわちノヴァーリス] のいささか神秘的な言葉に託してこう言いた

くなるのだ、生きるということは書くことだ、人間の唯一の使命は神性の思想を造形精神の石筆をもって自然という石版に刻み込むことなのだ。」

およそ二百年前のドイツの思想世界に革命的な地殻変動をもたらしたあの大いなる共同幻想、観念論哲学とロマン主義運動——あのドイツ近代思想世代の精気漲る荒々しい青春の激動期を身をもって生きた一人の若者のこの瑞々しくも青々とした一文をもって拙論の結びの言葉に替えたい。

とはいえ重ねてもう一言、蛇足を書き加えて論者本音の締め括りをつけておこう。

自称「断章的体系家」(PL II-815)フリードリヒ・シュレーゲルの理論的著作ないしは講義類から彼の断章的書法の中枢神経の一つである「機知」の機能とその射程を想定して曲がりなりにも「機知の理論」らしきものを再構成することは困難ではない。しかしほかならぬこの断章的書法の「化学的」実践である際限なく融合、分裂して枝分かれしてゆく切れ切れの断片的言説の非連続的・非論証的・非体系的な連なりは、そのような「機知」の論理化ないしは体系化のすべての作業を一挙に挫折させる。もともと「断章的体系家」などという概念結合は、「自己創造と自己破壊との絶え間ない交替」(AF 51)の目まぐるしい渦に巻き込まれて自己実現の確たる場と方向を見失い、その生涯の最後に到ってもなお自分の真の正体を掴み切れずに終わらざるを得なかった一人のプロテウスの人格の仕掛けた罠、「イロニー」という名の言葉巧みに人を欺く弁証法的詐術であるかもしれないのだ。とすれば「フリードリヒ・シュレーゲルの機知論」をそれなりに首尾一貫した論脈の中で纏め上げようとした本稿前段でのすべての努力が、後段での「機知」をめぐる「フリードリヒ・シュレーゲルの断章群」によって意地悪く笑殺されるだろうことはむしろ自明である。そしてこれらの断章の一つ一つがそのとき浮かべる表情は、フリードリヒ・シュレーゲルを読むということはフリードリヒ・シュレーゲルを読み損なうことと同義であり、フリードリヒ・シュレーゲルについて書くとは絶え間のない書き損じの連続以外のなにごとも意味しないと告げているのである。このパラドックスは底知れない徒労感とないまぜになった一種異様な愉悅を含む無類の混合感情を喚起する。今般、論者がフリードリヒ・シュレーゲルの思想の森の景観を描いて見せる役を買って出たのも、そして本稿の紙数のほとんど半分を割いてこの折角の景観をそのまま八幡の藪知らずに変えてしまいかねない諸断章の延々たる羅列に当てたのも、この自称「ロマン主義哲学者」(PL II-815)の「絶え間のない自己パロディー」(LF 108)の痛烈な可笑しみをいわば「実証的」に聞き手の方々と心楽しく共有したかったがためである。